

事項	飼料米用品種「みなゆたか」の低コスト生産のための疎植栽培技術		
ねらい	「みなゆたか」を用いた飼料用米生産において坪当たり37株の疎植栽培による低コスト生産技術を明らかにしたので、参考に供する。		
指導内容	<p>1 栽培方法 稚苗植えて、坪当たり37株植えとする。</p> <p>2 施肥体系 総窒素施肥量は地帯別施肥基準量の1.3倍とし、その70～80%を基肥に、20～30%を減数分裂期に追肥として施用する。</p> <p>3 籾水分の推移 立毛状態で籾水分含量は20%前後まで直線的に減少する。そのときの出穂後積算気温で1,300℃頃で、これ以降では籾水分の減少は緩慢となる。</p> <p>4 刈取時期 (1) 玄米給与の場合は、整粒歩合が最も高くなる出穂後積算気温で1,200℃頃とする。 (2) 出穂後積算気温1,400℃以降では、穂首の折れや、脱粒による収穫ロスが発生するので、この頃を収穫終期の目安にする。</p> <p>5 経済評価 (1) 労働時間は慣行比で86%と少ない。 (2) 生産費は慣行比で90%と少ない。 (3) 所得は慣行比で14%多い。</p>		
期待される効果	「みなゆたか」を用いた疎植栽培の普及拡大が図られる。		
利用上の注意事項	<p>1 疎植栽培では葉色が濃いので、葉いもち等の病害虫の発生に注意する。</p> <p>2 飼料用米等では、使用できる農薬の種類や使用時期等を指導機関や契約先に確認し、ドリフト対策を徹底する。</p> <p>3 経済評価は、精籾重での試算で、所得には助成金80,000円を算入している。</p>		
問い合わせ先(電話番号)	農林総合研究所 作物部 (0172-52-4396)	対象地域	津軽中央地域
発表文献等	平成22～23年度 試験成績概要集 (農林総合研究所)		

【根拠となった主要な試験結果】

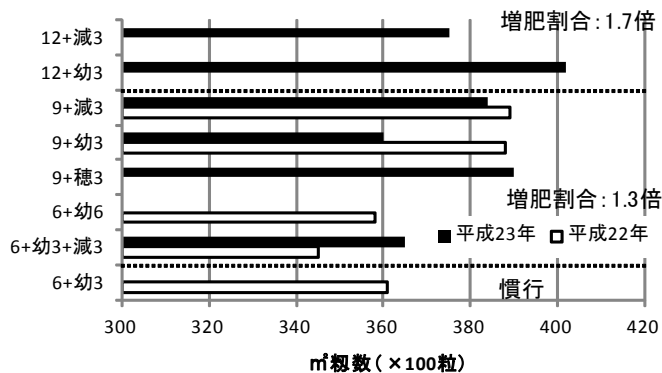


図1 増肥効果によるm²当たり粒数 (平成22～23年 青森農林総研)
 (注)1 「幼」は幼穂形成期、「減」は減数分裂期、数値は窒素分量(以下、同様)
 2 施肥には硫酸を使用(以下、同様)

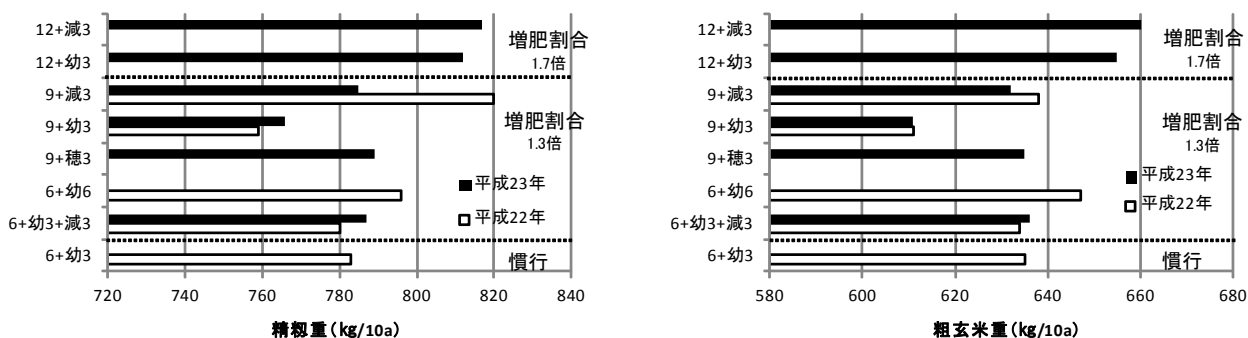


図2 増肥効果による精粒重及び粗玄米重 (平成22～23年 青森農林総研)

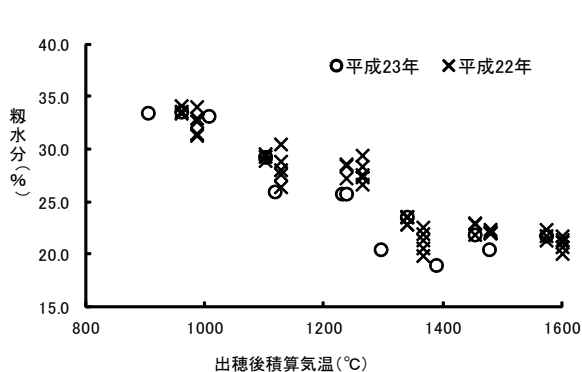


図3 出穂後積算気温と粒水分の関係
 (平成22～23年 青森農林総研)

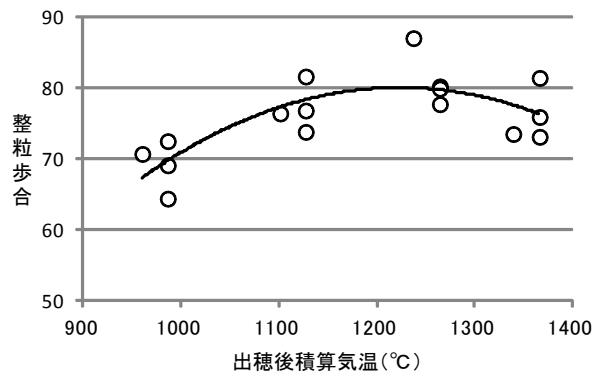


図4 出穂後積算気温と整粒歩合の関係
 (平成22年 青森農林総研)
 (注)1400℃以降は、穂首の折れや脱粒多発

表1 収量、労働時間、生産コスト、収益性 (平成22～23年 青森農林総研)

区名	収量(精粒重) (kg/10a)	労働時間 (時間)	変動費 (円)	固定費 (円)	経営費 (円)	労働費 (円)	生産費 (円)	粗収益 (円)	所得 (円)
疎植区	803 (89)	23.0 (86)	42,106 (86)	38,171 (100)	80,277 (92)	28,974 (86)	109,250 (90)	28,088 (89)	27,811 (114)
慣行区	898 (100)	26.8 (100)	48,795 (100)	38,171 (100)	86,966 (100)	33,762 (100)	120,727 (100)	31,413 (100)	24,447 (100)

- (注) 1 栽植株数は疎植区で37株/坪、慣行区で70株/坪
 2 使用箱枚数(/10a) [疎植区] H22:7枚、H23:12枚 [慣行区] H22:20枚、H23:33枚
 3 施肥は硫酸を使用で施肥体系は両区とも基肥9Nkg/10a+追肥3Nkg/10a(幼形期)
 4 1時間当たりの自家労働費は1,260円、収量(精粒)単価は35円/kg